故郷の文化の発展を

―野田宇太郎が残したもの―

蔵書237,931冊、年間貸出冊数401,580冊。毎日、たくさんの人が利用する市立図書館。この図書館が開館して今年で30年になります。

いまや当たり前のように存在する図書館ですが、その建設の背景には、故郷を思う一人の詩人、野田宇太郎さんの存在がありました。

図書館ができる前

現在の市立図書館は、文化会館、野田宇太郎文学資料館とともに、総合文化施設「小郡市民ふれあい広場」として、1987年11月3日に開館しました。

これ以前、小郡には町制時に設けた公民館図書室が1つあるのみ。当時、県内でも図書館を持つ自治体は少なく、小郡市でも、図書館を建設する計画はありませんでした。

図書館建設の契機

1984年7月、小郡市に訃報が舞い込みます。小郡市出身の詩人であり、編集者、文学評論家の野田宇太郎さんが、心筋梗塞で急逝します。

生前から、故郷のために文化活動をしたいという思いがあった野田さん。残された遺言には、故郷の文化発展のために、自分の蔵書を役立ててほしいという内容が書かれていました。

蔵書を小郡市へ

そこで立ち上がったのが、野田さんと親交のあった霊鷲寺(りょうじゅうじ)の住職、中村良之さんです。もともと中村さんは「小郡市に図書館を作りたい」と活動していました。野田さんの生前、「小郡市に、市民全員が自由に使える市立図書館を作りたい」と構想を話したところ、野田さんは「自分が蔵書を寄贈したらどうだろうか。応援する」と言ってくれたそうです。

野田さんの蔵書は、個人所蔵としては膨大で、非常に貴重なものもあったため、久留米市や柳川市、東京の町田市や武蔵野市など複数の自治体が寄贈先として名乗りをあげました。

中村さんは、市と野田さんの遺族との橋渡し役として交渉にあたりました。中村さんや当時の市企画課長は何度も上京し、遺族と話し合いました。この熱心な交渉の末、小郡市へ野田さんの蔵書約3万点の寄贈が決定しました。

野田さんの逝去から3年、文学資料館を併設した、県内でも珍しい図書館が完成しました。

▲野田さんの遺言

遺言の2番目に、「わたくしが所有する文学書その他の書籍資料は一個人のものでなく、いはば国の文化財として公共のために永久に保存すること。そのためには適当な方法を講ずべし。決して金銭に代ふるべからず。故郷に財団法人の資料館をつくり、少しでも日本文化のため役立つやうに努力すべし」と書かれています。

詩人　野田宇太郎

野田さんは、1909年三井郡立石村大字松崎(今の小郡市松崎)生まれ。恵まれた家庭で育ちましたが、8歳のときに母を、18歳のときに父を亡くします。

その後、文学を学ぶため東京へ進学しますが、病気のため学業を断念。松崎へ帰って療養生活を送ります。しかし、間もなく、義母が再婚した夫と出奔し、野田さんは家財を失い松崎を離れます。

野田さんは、久留米で文房具屋のかたわら詩作に没頭。地元の文学青年らと文学同人誌『街路樹』に参加します。その後、野田さんは上京し、詩作のほか雑誌『文藝』などの文学雑誌編集者として活躍し、三島由紀夫や幸田文などの優れた作家も発掘しました。

また、野田さんは、近代文学の舞台や、文学者ゆかりの場所を訪れ、作者と作品のつながりを解明した「文学散歩」の創始者としても大きな功績を残しました。

故郷松崎への思い

野田さんは、松崎を離れた後、戻り住むことはありませんでしたが、決して故郷を捨てたわけではありませんでした。むしろ、父母との思い出が残る故郷松崎への思いは常に心にあり、故郷への思いを詩や文章に残しています。

また、故郷からの依頼は優先的に受けていたという野田さん。立石小・中学校、大原小学校、朝倉・三井・小郡高校など、数多くの校歌の作詞も手掛けました。特に小郡高校校歌は、野田さん最後の作詞となりました。

その他、立石のPTA報や公民館だよりなど、地元からの依頼も受けて寄稿しています。その一つの「くろつち第44号(昭和39年1月)」では、立石小の子どもたちに向けて次のような言葉を残しています。

〝皆さんはわたくしを、どこか遠くの方にいる人間のように考えているかも知れませんが、わたくしはいつも皆さんと一緒にいるのです。わたくしはいつでも松崎の野田宇太郎です。〟

▲松崎　桜馬場

Interview

中村良之さん(霊鷲寺住職、野田宇太郎文学資料館館長)

私が東京で雑誌編集者として働いていたころ、野田さんと親しくさせていただくようになりました。私が寺を継ぐために松崎へ戻ってからも、野田さんは毎年柳川の白秋祭に参加する折に、寺へ泊まっていかれました。野田さんはその頃から「ゆくゆくは故郷に帰りたい。故郷に帰って『本当の仕事』をしたい」と言われていました。私が図書館構想の話をしたときも、野田さんは非常に喜んでくれました。ありがたいことに蔵書を寄贈という話もしてくれました。野田さんの蔵書があれば文学館ができます。当時、文学館を併設した公共図書館は日本にはあまりなかったので、これは良い構想を得たと思いました。野田さんを小郡に呼び戻そうと運動していた青年会議所も手伝ってくれ、そういった動きを盛り上げていきました。

特別企画展

「野田宇太郎―激動の時代を駆けぬけた編集者―」開催中！

戦中・戦後の激動の時代に、編集者として信念を持って駆け抜けた野田宇太郎の姿勢と功績を紹介します。

期間　11月28日(火)まで

時間　午前10時～午後6時(金曜は8時まで)

※毎月第1・3月曜日、最終水曜日は休館

会場　野田宇太郎文学資料館(市立図書館内)